

インターアクション能力を育てる会話教育

中井陽子

(東京外国語大学 留学生日本語教育センター)

0. 研修会の趣旨 (スライド1~6)

本研修会では、以下の2点から「インターアクション能力を育てる会話教育」について考える機会とした。

- (1) 会話教育を中心としたインターアクション能力育成のための基本的な理論と具体的な実践例の紹介
- (2) 参加者自身の現場にあわせた会話教育実践例のデザインの検討

研修会の構成は、以下の通りである。第1部では、中井(2010)、中井(2012a)で述べた「インターアクション能力育成のための会話教育」について、理論、実践、会話指導学習項目の面から紹介した。第2部「会話教育実践をデザインしよう!」では、第1部の講義で紹介した理論・実践・会話指導学習項目を参考に、グループで独自の会話教育実践のデザインを行い、発表してもらった。

第1部 講義 「インターアクション能力育成のための会話教育」	・講義1:理論編 ・講義2:実践編 ・講義3:会話指導学習項目
第2部 ワークショップ 「会話教育実践をデザインしよう!」	・グループワーク ・グループ発表&質疑応答

1. 第1部 講義

1.1 講義1:理論編 (スライド7~27)

まず、会話データ分析を行い、それをもとに会話指導学習項目を整理し、会話教育実践を行うといった「研究と実践の連携」の重要性を指摘した。そして、この「研究と実践の連携」は、教師だけでなく、学習者自身もメタ認知を用いて、自身のインターアクション能力を自律的に向上させていけるような会話教育実践をデザインすべきだということも強調した。(スライド8)

次に、「会話と会話教育の基本的な概念」として、そのそも会話とは何か、会話にはどのような種類や機能があるのかについて述べた(スライド9~10)。そして、会話や会話能力を考える上で重要な概念である「メタメッセージ」と「インターアクション能力」(ネウストプニー1995)とは何かについて紹介した(スライド11~12)。特に、インターアクション能力とは、言語能力、社会言語能力、社会文化能力を含むものであり、こうした総合的な能力育成を日本語の会話教育で目指すべきだということを強調した(スライド13~20)。

さらに、「会話授業の設計」として、「実際使用—練習」「計画性—即興性」の度合いの軸から捉えた会話教育実践の例を紹介した(スライド21)。さらに、言語に関する知識を得る「FACT」の授業と得た知識を実際に運用できるようになるための「ACT」の授業の両方を行う「FACT—ACTの二分法」(Jordan 1987等)の重要性について述べた(スライド22)。また、学習者が自身の考えや行動について客観的に考え、調整できる「メタ認知力」(Oxford 1990等)を育成する必要性についても強調した(スライド23~24)。そして、メタ認知を活性化させながら「FACT—ACT—内省」を段階的に行っていく会話教育実践のデザイ

ンも紹介した（スライド 25）。「認知的成果を重視—行動的成果を重視」と「指導中心—支援中心」の軸から捉えた「学習指導法の 4 類型」（森 2002）も紹介した（スライド 26～27）。

1.2 講義 2：実践編（スライド 28～77）

中井自身が実際に行った会話教育実践とその教材、および学習者の成果物などを動画も交えて紹介した。

●その 1：コミュニケーションの 6 つの機能別教材例（スライド 29～32）

中井（2010）で紹介している初級後半～中級対象の「コミュニケーションの 6 つの機能別教材例」を紹介した。「コミュニケーションの 6 つの機能別教材例」には、「1. 事実関係」「2. 心の動き」「3. 働きかける」「4. 交流」「5. メタ言語」「6. 言葉で遊ぶ」があり、これらを学習目的や学習者に合わせてバランス良く取り入れた会話教育実践をデザインする必要がある点を述べた。

●その 2：会話クラス『日本語会話 2』（スライド 33～44）

中井（2010, 2012a）で紹介している初級後半～中級を対象とした談話レベルでの会話指導学習項目を扱った会話教材を紹介した。主に、聞き返し、あいづち、評価的発話、フィラー、メタ言語表現、質問表現、司会者の役割などの談話技能の教材を取り上げた。

●その 3：ビデオ作品作成プロジェクト（スライド 45～55）

中井（2012a）で紹介している中上級を対象とした「会話データ分析・会話練習とビデオ作品作成プロジェクトを融合させた会話教育実践」を紹介した。この実践では、コース前半にテレビ番組などの会話を分析し、そこから得られた特徴を指導学習項目として実際に会話練習してみた。そして、コース後半に、コース前半に分析・練習した指導学習項目を取り入れたビデオ作品を作成するプロジェクトを行った。このプロジェクトでは、学習者がオリジナルのシナリオを作成し、演じているところをビデオ撮影・編集し、最後に観客の前でビデオ上映した。学習者のビデオ作品は、『あなたが選ぶ白馬の王子』というトークショーの他、漫画ドラマ『のだめカンタービレ』『花より男子』『乙男』のパロディドラマ、『料理対決～台湾 v. s. 韓国～』というオリジナルドラマなどがあった。

●その 4：映画で学ぶ日本語（スライド 56～77）

中井（2012b）で紹介している上級を対象とした「映画視聴と演劇を融合させた会話教育実践」を紹介した。この実践では、コース前半に、『となりのトトロ』『デスノート』など、5 つの映画作品を視聴しながら、言語能力（例：ディクテーション、アフレコ、単語クイズ）、社会言語能力（例：スクリプト読解・読み合わせ、ストーリーテリング、指定の単語を使って映画ストーリーを説明するクイズ）、社会文化能力（例：内容把握問題・予測、関連資料読解、映画のテーマのディスカッション、意見ワークシート記入、映画の分析発表とそのフィードバック）といった総合的なインターアクション能力育成のための様々な活動を行った。そして、コース後半に、コース前半に視聴した映画のテーマや内容・登場人物などを参考に、学習者がオリジナルのシナリオを作成し、観客の前で演じる演劇上演会を行った。学習者の演劇作品は、『となりのトトロ』や『デスノート』をミックスした『トトロノート』などであった。

1.3 講義 3：会話指導学習項目（スライド 78～80）

中井（2012a）に掲載している「会話指導学習項目リスト」の「言語能力」「社会言語能力」「社会文化能力」の各項目について紹介し、会話教育実践での取り上げ方の注意点について説明した。

2. 第2部 ワークショップ「会話教育実践をデザインしよう！」

2.1 グループワーク

まず、5～8人程度のグループで簡単な自己紹介をし、グループワークの司会、書記、発表の担当者を決めてもらった。そして、第1部の講義で紹介した会話教育の理論と実践、会話指導学習項目リストを参考に、グループで会話教育実践をデザインし、ワークシートに記入していつてもらった。ワークシートに記入する事項は、以下の通りである。

□ どんな会話教育実践をデザインするか

- ・学習者の背景（レベル・身分）
- ・学習の目的
- ・扱う会話の種類・機能
- ・指導学習項目（言語能力、社会言語能力、社会文化能力）

□ どんな授業の流れになるか

- ・授業で行う活動とその順番
- ・参考にした理論面（実際使用／練習、計画性／即興性、FACT／ACT、メタ認知、認知的成果／行動的成果、指導中心／支援中心、コミュニケーション機能）

2.2 グループ発表&質疑応答

各グループの代表者1～3名により、記入したワークシートを実物投射機（OHC）で見せながら、デザインした会話教育実践について5分程度で発表してもらった。発表内容は、各グループのワークシートPDF版を参照のこと。発表後、中井から各グループの会話教育実践デザインについてフィードバックを行った。

3. まとめ

今回の研修でインターアクション能力育成を目指した会話教育の理論と実践について具体例を交えながら紹介し、参加者自身の教育現場で活かせるように心がけたが、すべての内容を消化して自身の現場に合わせて取り入れるには、時間がかかると思われる。グループ発表の中には、ユニークな発想で会話教育実践をデザインし、他の参加者に新たなアイデアを与えるものが多かった。しかし、研修後に実施した参加者の感想アンケートには、自身の現場で従来行っている会話教育実践の枠組からあまり出られていないデザインになってしまったかもしれないという振り返りも見られた。今回の研修で得た知識（FACT）や経験（ACT）が、今後の台湾での会話教育に少しでも役立つ示唆を与え、少しずつでも各現場に合った新たな会話教育実践のデザインと実施に繋がることを願う。

参考文献

- ・ 中井陽子（2010）「第2章作って使う第4節会話授業のさまざまな可能性を考える」尾崎明人・椿由紀子・中井陽子（著）『日本語教育叢書「つくる」会話教材を作る』関正昭・土岐哲・平高史也（編）pp. 135-188 スリーエーネットワーク
- ・ 中井陽子（2012a）『インターアクション能力を育てる日本語の会話教育』ひつじ書房

- 中井陽子 (2012b) 「映画視聴と演劇上演を融合させた授業の分析—インターアクション能力育成を目指して—」『IAPL オンラインジャーナル』創刊号 国際表現言語学会
<http://web.uvic.ca/~hnserc/IAPL/journal/J2012/01nakai.pdf>
- ネウストプニー、J. V. (1995) 『新しい日本語教育のために』大修館書店
- 森敏昭 (2002) 「10 章 学習指導の心理学エッセンス」(編) 海保博之・柏崎秀子『日本語教育のための心理学』pp. 153-176 明光社
- Jorden, Eleanor. 1987. The target-native and the base-native: Making the team. *Journal of the association of teachers of Japanese* 21. 1: 7-14. Jorden, Eleanor and A. Ronald Walton. 1987. Truly foreign languages: Instructional challenges. *The annals of the American academy of political and social science*, ed. by Richard D. Lambert and Alan W. Heston. 490:110-124.
- Oxford, Rebecca L. 1990. *Language learning strategies: What every teacher should know*. Boston: Heinle & Heinle. (宍戸通庸・伴紀子 1994 (訳) 『言語学習ストラテジー 外国語教師が知っておかなければならないこと』凡人社)